

小檜山ルイ 著

『帝国の福音——ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』

(東京大学出版会, 2019年, 9,680円)

恐ろしい本である。読者は、心を尽くして大事に育ててきた小さな愛玩動物が、次第に成長して大きく変貌を遂げ、最後には化け物となって今にも飛びかかりそうな気配を感じつつ、本書を閉じることになる。主人公のルーシー・ピーボディは、バプテスト宣教師の妻としてインドへ赴き、夫を亡くして帰国、子育てをしながら婦人伝道局の職員として働き、再婚して裕福な有閑夫人となり、東洋に女子大学を建設する募金運動に携わり、晩年はファンダメンタリストとなって、禁酒法を擁護する政治運動に挺身した。本書は、その生涯を追った一種の伝記ものと言えるが、その生涯は19世紀後半から20世紀前半までのアメリカを観察する定点観測的なパースペクティブを提供し、海外宣教という事業を通して、与える者と受ける者、支配する者とされる者、白人と現地人、恩恵と搾取、政治と宗教、文化と福音といったさまざまな権力と覇権の構造を照射する。400頁を超す長編は、はじめ丹念に収集された些細な史料に圧倒され、その含意を訝しみつつ読み進めると、やがていくつもの伏線が収束を始め、終盤に至ってそれらが一挙に爆発する、というヒッチコック的な物語になっている。

戦慄の主題は、温厚で寛容な白人の伝統的キリスト教が、いかにして狭量で独善的で攻撃的な原理主義者に変貌したのか、という問いである。本書の示唆するところによれば、実はそこには何の不思議も変節もない。彼らは、はじめから白人西洋文明の絶対的な優位性を信じていた。だからこそ、当初は遠い異国の野蛮な異教徒に手を差し伸べて恩恵を与えることもできたが、その優位性が宗教・文化・政治・経済において次第に脅かされる事態になり、怒れるアメリカに転じたのも、結局は自己の優位性を当然の前提として信じていたからに他ならない。海外伝道は、伝道地からの逆影響が本国を変えようというブーメラン現象の直撃を受けて、アメリカのキリスト教がリベラリストとファンダメンタリストに二極分解してゆく最先端の現場であった。

帝国主義との関わりは複雑である。現地白人の振る舞いを手厳しく批判したのが宣教師であったことなど、著者の長年の研究の蓄積が各所に生かされている。女性参政権をめぐる逆説も辛辣で哀しい。19世紀の女性は、政治に直接関与できなかつたため、私心なく資金集めに奔走し、政治闘争から距離を置いた中立的な存在として、確固たる道徳的な権威をもっていた。だが20世紀に入って参政権を獲得すると、政治闘争に巻き込まれてこの超越的な権威を失い、逆に影響力を失ってゆくのである。

各章扉の図版も貴重である。晩年のある写真は、「敗北した白人中流層の無念と自らの目標への執念、そして社会的孤立」を映し出しており、「ほとんどKKKを彷彿とさせる」ほどである。今日われわれが目にしていくアメリカ社会のトランプ化が、ここに黒々とした輪郭をあらわしている。

森本あんり (国際基督教大学)

油井大三郎 著

『平和を我らに——越境するベトナム反戦の声』

(岩波書店, 2019年, 2,640円)

「平和を我らに」という歌をジョン・レノンが発表して50年目にあたる2019年に刊行された本書は、「シリーズ日本の中の世界史」の一環として、日米両国内でのベトナム反戦運動史を、特定の党派に限定させずに多様なグループの動向を網羅して構成されたものである。

第I章で反植民地主義と冷戦の論理のあいだを揺れ動く米国のインドシナ政策を概観したのち、第II章から、第二次大戦後から1964年のトンキン湾事件までの時期における冷戦状況および日米国内での反戦平和運動について本格的に論じている。核兵器の登場によって、ストックホルム・アピール署名運動に代表されるような国際社会での反核の動きが胎動するなかで、日米両国における平和運動も反核の文脈を帯びていく経緯が主に叙述されている。第III章は、1965年の北爆開始から1967年までの時期において日米両国の平和運動がベトナム反戦を掲げていく経緯(米国では「ベトナム戦争終結全国調整委員会」、日本ではベ平連)について詳細に論じている。日米両国において共通してみられたのは、各団体の党派性やスタンスを乗り越えて、「ベトナム反戦」というワンイシューで共闘していくことの困難さである。それでもベ平連が中心となって1966年に東京で開催した「日米市民会議」は、国家の壁をこえた連帯を示す事例となったという。

第IV章は、米国におけるベトナム戦争に対する支持率において反対が賛成を上回るようになる1967年からジュネーブ和平協定締結に伴う米軍のベトナム撤退が開始する1973年までの時期を扱い、日米におけるベトナム反戦運動が最高潮に達していく経緯を扱っている。そのなかで中心的に論じられているのは、世界各国で展開された10月21日の「国際反戦デー」の動きである。ただ、米国ではペンタゴン突入を試みる一部のSDS(民主社会を求める学生組織)メンバーの登場、日本では学生と機動隊との衝突(新宿「騒乱」といった急進的な動きも登場し、運動を分裂・停滞させた要因にもなったことにも触れている。

こうした社会運動のもつ限界性にふれつつも、著者はエピソードにて、日米においてベトナム反戦の大衆運動が大規模に展開されたことや、ベトナムへのまなざしが、日米両国における学術研究(米国ではニューレフト史学・世界システム論、日本では第二次大戦における日本の加害性の自覚・ベトナム研究)が活性化する契機となったことの意義を強調して本書を閉じる。

「平和を我らに」発表から1か月後に開催された、若者の平和の祭典といわれたウッドストック音楽祭にてジミ・ヘンドリックスは、歪ませたギターで「星条旗」を演奏した。あの歪みは「空爆に苦しむベトナム」を表現したものであるとジミは語っていたが、その空爆(や軍事にともなう暴力)は今もなお世界のどこかで展開されている。本書は、いつまでも変わろうとしない政治・社会状況のなかで、現代のわれわれの在り方の再考を促す一冊となろう。

池上大祐 (琉球大学)